

第13回 日本構造医学会 京都学術会議特集



2008年11月2日 同志社大学寒梅館ハーディーホール

・全国から約300人の会員が参加・

日本構造医学会は11月2日、京都・今出川の同志社大学寒梅館ハーディーホールで、第13回京都学術会議を開催した。通常、休日は静まりかえる会場周辺だが、別キャンパスで文化祭が開催されていたこともあり、学生でにぎやかであった。今年は京都での開催であったが、昨年の東京学術会議と同様、全国から約300人の会員が集った。

今大会の学会長は、京都大学経済研究所所長の西村和雄氏。西村氏は学会長挨拶で、「医療というのは、きわめて複雑かつ多岐にわたるもので、学ばば学ぶほどその1つひとつをそのまま記憶していくという作業に終始し、結果理論がおろそかになってしまう。そのなかで構造医学は、医療以外の自然、社会の構成要素をもとらえることにより見事に理論体系化したものとい

える。私自身、ヒトを観察するうえでは、構造医学の理論に矛盾がないことを確認している」と述べた。経済学という異なる分野の重鎮によるこのような評価は、あらためて構造医学の正当性を認識させるものであったいえよう。

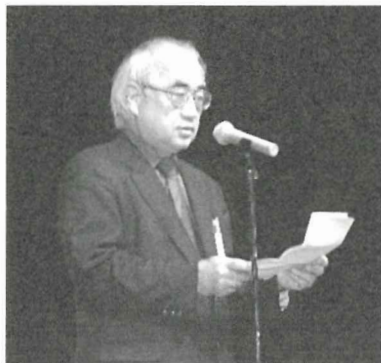
学会長挨拶の後、一般演題発表に入る。佐藤文在・山本泰司両氏による「小児バネ指の治療を経験して」、田所生利氏による「顎関節クリック音の消失希望で来院したプロバレリーナ」の両発表は、前者が観血的処置も検討しなければならない、後者は構造医学的処置を断念するという点で、有意な結果が得られたという内容ではなかった。しかし、特殊性が強いであろう症例についての情報提供、また何が不明なのかを明らかにしようとする試みは、臨床者が今後遭遇するであろう類似症例の考察に十分資する内容であるように思われた。笠井浩一・石津正貴氏による「大枠としての歩容観察の考察2」は、



寒梅館



ハーディーホール

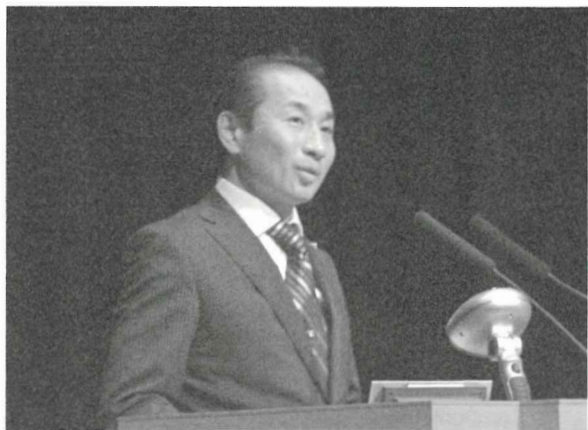


左：西村和雄氏による大会長挨拶
中：パネル展示
右：出展会場風景

昨年の東京学術会議で発表された内容を発展させたもので、歩容観察の手法として重心を中心に点で観察するというミクロな手法からさらに一歩進めて、マクロつまり全体像を観察して考察するものであった。関口勝夫氏による「整膚が歩行に与える影響」では、皮膚を引く手技を全身に施すことによって、歩行の改善やさまざまな身体機能の向上をもたらす体験をもとに考察した結果が発表された。以上の演題とは趣を異にしていたのは、李庸吉氏による「医療責任としての説明義務と裁量の特質」で、医療と法律の学際領域についてである。昨今の医療訴訟の増加、医師の逮捕など、医療人としてもはや対岸の火事ではないトピックに鋭く迫った発表であった。

・理事長による特別講演・

今回は、一般演題のほか、吉田勸持理事長による特別講演として「大枠での高次中枢の成立と、情報処理としての接続 脳の成り立ち、歩行の意味」が発表された。歩行と脳そしてそれに関連する論点の説明を通して、ただちに実益を得るものではないが、あたかも所与のものとして思い込んでいる概念について考え直してみること、いわゆる「そもそも論」の重要性を唱



吉田勸持理事長による総括

えた。

『『そもそも論』』というのは、一種の神学論争でありますから、結論というものがなかなか出ません。そうすると、結論を急ぐという場合には『『そもそも論』』は意味をなさないかのように感じます。しかし逆に言えば、結論が出てこないということは、そのプロセスにおいてそれだけいろいろな意味で考えを自分で煮詰め、精緻な自分の思考方法というものを確立していく作業をするということになります。そして『『そもそも論』』を考えたことが、のちに何かを企画し、あるいは創造するさいに非常に役に立ちます。」

会場そばのスペースには、構造医学関連の機器や健康食品、書籍のほか、講演者の作成したポスターも公開されていて、休憩時間には大勢の人が殺到していた。

なお、来年（第14回）は第12回と同様、東京・学士会館で開催予定。